

I

INTERVIEW

私たちが考える

21世紀の教育改革

東京工業大学教授(社会学) 橋爪 大三郎



漠然とした不安

—— 養護学校の現場でも、通常学級で起きている学級崩壊に象徴される現象みたいな形では出ていないけれど、先生方がはっきりとわからないけれど、漠然とした不安を抱えて毎日の生活を送っています。この漠然とした不安というものがどこからくるのだろうか。それを明らかにしたいと考えています。先生たちはこれまで自分たちが実践してきたやり方——小学校、中学校の場合子どもとの対応、我々の場合、非常に障害の重い子供たちですので保護者との対応——従来のやり方が通用しない、というのが分かっているんですね。だけど、それがなぜかという深い背景とか深い理由が、まだ明確ではないと思うのです。

「最初に質問していいですか。『不安』とおっしゃいましたが、それは障害児教育に関わる先生が固有の不安とお考えですか、それとも障害児教育に限らず現代の社会で教育を行うもの、一般の健常者といえますか、そういう方々全体の不安というか、そこに焦点を当てていられるのですか。」

—— 障害児教育に限らないと思っています。共通のものだと思います。

「現れは特別であるかもしれないが、根は

同じと考えていいですか。」

—— 同じです。健常なお子さんを扱うにしても、今言った重いお子さんを扱うにしても、子どもに関わる関わり方は、子どもによって関わり方は違いますけれど根っこは同じだと思っています。

「もう一つ質問させていただければ、障害の重い人の教育というのは非常に困難を伴うわけですね。その技術的な困難に伴う不安というものでもないのですか。」

—— それもあるのですが、それだけではありません。

「それはどういう不安なのか、もう少し。」
—— 分かりやすく言いますと、保護者との関係の中で、従来は、例えば保護者に対応しているときに、『学校で〇〇ちゃんにこういうことをやっているの、家に帰ってやらせてください、お願いしますね。』と申し上げますね。そうすると、昔は『ハイわかりました。』という形で通りがいいわけです。ところが今はもうそういうことではなくて、『なぜそうやっているか。』明確な説明をしなければいけない、本当は当たり前なんですけど。ところが、なぜやっているかというところから、次々に質問が派生していくと、特に障害の重い子の場合に、明確に答えられない部分がどこかで出てくるのです。

「障害児教育はこういうものだ、ということでは通らないのですか。」

—— ええ。結局、この子にはこう、こうい

うことはこうと明確に導いていかなければいけない。ところが障害児教育にもいろいろな考えがあるわけです。お母さんはある考えを信奉していて、私たちは別の考えを別の方法でやっているという場合、とくに。

「あなた方の考えに立たなければ、教育できないわけですね。」

—— 折り合いが非常につきにくい。そのあたりで先生たちは皆優しいですから、そこで七転八倒して保護者と葛藤するよりも、結果的に保護者の思いを受け入れてしまう。

「それが自分の信念に合致するか、子ども達のためになるかというのは分からないわけですね。」

—— 少し誇張して申し上げていますが、そういった側面があるということです。従来は教師がシーソーの上にあつたんですけど、いまは関係が逆転してしまっている、という状態が起きている。そのあたりをもう少し解明したい、なぜそういうことが起きているのか、その辺を知的に解明した上で背景に底流する理念、そういったものを先生にお教え願えば、という思いがあります。現場の教師も、私たちと同じ思いを持っていると思うのです。共有している漠然とした不安みたいなものを明確化する、それだけでも違うのではないかと考えています。

「やはり、依頼原稿にしなくてよかったと思うのです。依頼原稿で書いたのでは、なにが求められているのか、ということ私を理解することはたぶんできない。だから見当はずれなことを偉そうに書く、それはいいことではない。今お話を伺って私が分かる範囲でお答えし、また質問する。それにお答えする。そのプロセス以外に私が限られた時間の中で誠実につきあう方法はなかったわけで、ですからやっぱりこういう形にしてよかった。」

学校の病理

—— ここ十数年来、新聞等で繰り返し報道されている負の学校現象、例えば「登校拒否」

とか「いじめ」とか「体罰」それから、最近には特に「学級崩壊」がありますね、そういった現象に関して、日頃どういう感じを持っておられましたか。

「学校という場所が、まことに妙なおかしなことになっている、という様々な現れは、マイナスの現象『学級崩壊』とか『体罰』とかそれぞれが違うにしろ、一つの病気を指し示していると思う。それで、どうして学校の病気が治らないのか、ますます酷くなっているのか、こんなふうに思うのです。例えば、学校以外の組織、企業とか家庭とか、そういうものはその中で問題が起こったとき、それをどうにかしようという力学が働いて、病気が酷くなっていかないようなメカニズムがあるのです。家庭だったら、家庭でその場で真剣に生きている人が何人かいて、そこで話し合ったり役割を分担しなおしたり、場合によっては、離婚したりして病的な状態が続かないようにしている。会社であれば、景気が悪くなったらリストラをしようとか、技術革新しようとか、時代に対応しようとか、外部と提携しようとか、いろいろする。そして、本当にいらぬ人があれば、くびにする経営者や従業員や、どちらの場合もあるかもしれない。こうしてマイナスをプラスにしていこうとする。学校の場合、この力が働いていない。なぜかという、そこには責任者がいない。たまたまそこにいるだけで、何とか自分の地位を守っていればいい、たまたまここに来て勉強するように言われただけで、実際本当に来たくて来ているわけではない。こういう人たちが集まると、何か問題が起きたときに責任逃れをする。問題を解決する努力をしない。ますます、あのようなことが起こってくる。どんどんひどくなっていく。ますます責任逃れをしなければならぬ。こういうメカニズムが働いている。こんなふうに思いますから、社会というのは皆真剣に生きていて、そして幸せになりたいと思っている。そうするとその力が社会の中で健全なエネルギーの基です

よね。学校に来ている子ども達や先生達は皆そういう思いがあるはずですよ。これをうまく組み合わせそれが発揮されるようにすれば問題は解決するのではないか。これが『選択』『責任』『連帯』という三つをあげたわけですが、全部関係がありますが、とりわけ『連帯』というところですね。』

学校には希望がない

——学校は無責任体制になってしまっているということですが、どこに原因があるとお考えですか。

「間接的というか、直接的というか、原因は文部行政のまずさ、制度のまずさ、ということもあると思うのです。例えば、教育委員会というものがあるけど、親の意向よりも文部省という官庁の意向を反映して、現場を、学校を横並びで管理しようとする。そうすると学校現場で誰の言うことを聞けばいいのかという、教育委員会、文部省の言うことを聞かなければならない。聞いていさえすればいい。こういうふうになってしまって、親や子どものことを聞かない、これつまり教員の無責任。管理というのは無責任を助長するようになっている。教育者としては親や子どもの前に全人格をさらけ出して、体を張って教育する。これは私が信じる正しい教育なんだ。間違っているかもしれないけど、最善を尽くしているのだ、ということが伝わらないといけないし、伝われば何とかかなると思う。今、それが伝わらないような制度になっている。そういう力が伝わらないように、伝わらないように、という制度を作ってしまったということです。更に、その遠因というのをいろいろ考えてみると、様々な社会的文脈があって、管理の方法は昔もそれほど違わなかったと思う。ただ、昔はそれなりにうまくいっていた要素が、家庭というものが学校を尊敬していた。子どもが学校に行くことに利益を見出していた。学校を卒業すれば、将来いいことがあるという希望を持っていた。そういう社会

的文脈があれば、学校管理の方法がどうであれ、子どもがそれぞれ自分なりに物心が付いたときから、勉強の目的を見つけて、学校の中で自分を見つけていくでしょう。そして、卒業した後教育を受けてよかったなど、社会の中に巣立っていくわけですね。今、このメカニズムがないわけです。社会は学校にあまり期待しない。それから子どもが学校で勉強してもいいことがあるとは思わない、むしろ苦痛だと思っている。そうすると逃げようとする。それから学校を卒業しても、みんなが学校を卒業している時代に特にいいことがない。むしろ変な学校を出てしまったら、いい学校を出なかったということになるわけで差別される。踏んだり蹴ったりですね。そこで無気力、無関心。そして学校を自分の人生の中に位置づけることができない子がたくさんいる。この子ども達に学校の中に人生はあるのだと、教員は言いにくくなっている。『社会的文脈』これが二番目だと思う。』

近代教育の光と影

——例えば、私たちの学校で指導していく40人なら40人の子ども達を1人で教師が教えている、そういう古い教育スタイルを続けているということに対して、子ども達が例えば、学校崩壊現象なんかに見られるように、なかなか集団で40人をつ一つの教材で集中させていくのが困難になってきている。その理由として、先生の教授方法のまずさがあるかもしれないけれど、必ずしもそれだけではなくて、何か私たちが戦後の子ども達を教育したり育てていく中で、集団主義的な教育になじまない教育方針でやってきたのではないかと、思うのですけれど、そのあたりはいかがでしょう。

「そこも文部行政のその元になる考え方、クラス一斉授業という方針がございますね。これは文部行政の悪口ばかりではなく、せいにはできないので、実は教員もそういう教育方法しか習って来ていませんから、疑問をも

ちながらもその信奉者が多い。それ以外の教育法を知らないというのが実体ではないかと思う。今、古い教育方法だとおっしゃいましたが、今となっては古いのですけど、これが新しかったのです。江戸時代の寺子屋を見ますと、何歳で行ってもいい。覚えのいい子は、利発な子は5歳、6歳で行くかもしれません。のんびりした子は7歳8歳で行くかもしれません。ソロソロだなあ、というときに行く。行くと、まずひらがな48文字を習い、それから千字文ですか漢字を順番に習っていく、それがすんだら、今度は論語とか女大学とかそんなようなものを習っていく、という全国共通のカリキュラムみたいなものが自ずからあって、それで家が忙しくなったら、その途中でも抜けてしまう。覚えが早かったり、優秀な子や熱心な親御さんの子どもは、その先まで行って、必要なだけこまでも学問していく。こんなシステムになっている。ここで見てみると、無学年それから個人差重視。寺子屋ですから10人、20人。一斉授業じゃなくて、一人ひとりの進度に合わせて教えているわけです。そして、親とのコミュニケーションですね。大根が取れましたと持ってきてみたり、そうやって近隣の社会に支えられながら教育していく。そして、どこに行ってもいいわけで、学校もないから子どもをぶったたいて妙な教育をしてたら、親御さんがよその寺子屋に預けてしまうので来なくなる。ですから、真剣勝負でプロとして教育していた。これが日本の民間教育の原点で、そして、幕末の頃日本の識字率は50%、半分以上の方が字が読めた。近代以前の社会としてすばらしいことです。国民が自分を高めて、社会をより賢く生きていこう、そしてそれを子どもに託そう、という親の思いのすばらしい結実だったのではないかと。ところが日本の近代教育はこれを継承しないで、敵視するところから始めた。寺子屋や女性のための女紅場—じょこぼと言いますが—そういうところを全部潰していった。明治1桁から20

年頃までにだいたいこれが根絶やしにされてしまい、そして、義務教育が普及した。義務教育の寺子屋との違いは、年齢で学年が決まる。学級が単位で、クラス一斉授業である。そして、教師が一方的な権威を持っていた。その上に教頭、校長がいて、その上に文部省がいて、どうしようもないヒエラルキーがある。簡単に言うと、軍隊と同じ。こういういわゆる近代的な規律訓練、そろって、お一、二ということ、計算可能、予測可能で、こういう労働力がないと、近代産業が興らないから仕方がないのですけど、しかし、それを親の願いと無関係に国が主導していった、という原点がある。これは戦後、実は教育の方法に関しては、民主化と言いつつ続いているんです。根本的なことは変わらなかった。そして、今日に至っているのではないのでしょうか。』

——戦後日本は変わっていない、ということですが、先生が別のところで「学校の二重性」という表現でおっしゃっていらっしゃいますが、学校とは実態は規律訓練の場なのだが、しかし、そうはいうものの、ルソーの言う透明な共同性のもと、優しい愛情の基にすくすく子ども達が成長していくという幻想を先生達は心にいだきながらやっている。学校の先生のイメージを言うと、「二十四の瞳」の大石先生だと思うのですけれどあのイメージを引きずって教育をやってきた。明治以降の100何年間の所謂近代教育の中で、教師はそういうものを持って生きてきたのではないかと。

学校の役割を明確に

「もしそうだとすると、特に戦後強調されていると思います。日教組とか新しい教育の様々な考え方、民主教育の考え方が出てきて、文部省の皇民化教育、少国民教育をうち消そうとして、これは善意からでもんだと思うけども、教師は概ねそういう風に信じている。ところが、これが子どもに価値観の混乱を招くということがあるのではないかと、あえて言

えば、戦前は天皇のための教育であり、天皇に、国家に役に立つ人材となる教育であって、内実は軍隊と同様の規律訓練であって、価値と実践が一致しているわけです。そこは価値観の一致があるから、それを信じるのが可能で矛盾がないわけです、システムの中に。ところが、戦後は一人ひとりが平等で人権があり、学校は抑圧的なものではなく、みなさんには将来がありますよというふうに言いながら、教師自身もそう信じながら、やっていることは戦前と同じ集団教育で、そこで同じことを教わりながら、個人個人のわずかな成績の差をいちいち問題にして、そして、上の学校に行く基準にして受験ということになった。だから平等であると言いながら、細かく成績で区別されて振り分けられていく現実が日々起こっているから、そうすると教師の愛情というものは偽善に見える。これは主観的なことと違って、子どもから見ると不思議に見える、自分の体験からして。そうするといいたいこの場所はなんなのか。学校は何なのか。非常に理解不可能な存在になっていくわけです。これは戦前に比べて戦後教育がすっかりしない点。もっと思い切って、愛情ではなく、社会は競争社会である。競争社会に出ていくためには、職業とか職業的な能力とか、学力とか、社会を生きるための信頼できる人格とか、約束を守る力とか、言葉を使う能力とか、そういうことをしっかりいま身に付けておかなければ駄目ですよ。社会のいわば模擬試験と言いますか、社会は厳しいけれども、いきなり厳しい波の中に放り込んだらいけないから、少し訓練のためのさざ波、これを順番に与えていく場所なんだ、というふうに割り切れれば、『二十四の瞳』じゃなくて、家庭の延長ではなくて、家庭とは違った原理で学校が動く。こういうふうにするのは一つの方法なのです。」

—— そのあたりを先生は、リアリズムという言葉でおっしゃっておられますね。そういうことに関してどちらかという、私たちは、

この50年リアリズムでなくて透明な共同性という中で、将来役に立つ特に産業的な人物を作るのではなくて、所謂、子どものための子どもの教育をやるうじゃないか、ということとやってきました。それにはっきり見切りをつける、学校というものに対するダブル・スタンダードが、子どもにとって教師を偽善に見せるから、そうではない教育、それがリアリズムということですか。

「リアリズムと私が言うのは、必要な能力を身に付けるというのは、愛情がないわけではなく、むしろ、愛情の表現ではないかと思う。愛情には感情や気持ちだけではなくて、やはり方法がなくては駄目なんです。例えば、アメリカの公立学校で問題になっているのは、統計的に出ているから仕方がないのですが、他のグループに比べると、黒人とかヒスパニックとかいう人たちの高校中退率などが高い。それから試験してみると、学力なんか少し伸びが悪い。そのまま卒業してしまうと、産業社会が必要とする人材ではなくなってしまいます。産業社会が必要とする人材を育てることは、まず本人のためになる。さもないと失業してしまう。失業するとどうなるかというと、麻薬の売人になったり、チンピラやくざになって、銀行強盗をやった結果撃ち殺されたり、悲惨な末路が待っている。あるいは文化教養がないために、家庭での暴力が起こって、そして子どもが不適應になって、学校でいい成績が取れない、という世代間での再生産になってしまう。人権問題なんです。人権問題として本人の生きていく可能性とチャンスを最大限にするために、まず、必要なのは学力を高めること、英語が読めること、他の教科ができること、そして、産業界に役立つ人材になること。これが子どもに対する愛情なのです。これがアメリカの切羽詰まった現状だと思います。日本の場合、エスニック・グループというものがあります。そうすると、目立って成績の悪いグループというものはなくて、本人の責任なんです。社

会階層は曖昧ですから。そうすると人権問題だということがよく分からないで、産業社会に役立つ人材を育てていこうとすると、ギスギスした学校になってしまうので、そうではないこと、例えば運動会を一生懸命やりましょうとか、遠足に行きましょうとか、皆仲間だぜとか、そういうことに力を入れてしまうのです。これは私から見れば学校が本来やるべきではないことをやりすぎて、学校が本来やるべきことをやっていない。」

—— ある種のロマン主義、センチメンタルということですね。

「なぜそうなるかという、日本には学校しかないんですよ。学校が学齢の子どもにとっては全てなのです。どうしてか。農村はほとんど地域社会が解体してしまい、都会は盛り場しかない、情報空間しかない、コンビニしかない。そして、親は核家族で、家族というのは、社会と言にくいような個人の固まりになっている。だから、仲間と出会える場所は学校しかない。そうすると子どもはやっぱり、何のかんと言っても、学校に異様に期待を寄せる。そして、学校で成績が伸びなかったり、友達に恵まれなかったりすると、必要以上に大きな疎外感を抱く。アメリカはどうなっているかという、まず、学校は学力を伸ばすところ、人格に責任を持つのは教会なのです。日曜日になると必ず教会に行き、家の中ではそういう行動基準とか、しつけとか何とかいうのは教会を中心に行う。はっきり分業している。更に、地域社会があって小学生なら小学生同士で近隣の遊び集団、それから、いろいろなスポーツ・クラブがあって学校や教会と無関係に、全部ボランティアの親で組織し、中学校、高校になるとベビーシッターとか、それからどの郵便局も高校生のためにいつもアルバイトの枠を作っている。どの会社もみんな地元の高校生をアルバイトで雇うことを義務にしている。そういう社会の訓練を、中学生高校生の時に順番にどんどんさせていくアルバイトというのが、と

ても奨励されていて、経済的な自活というものがとても奨励されている。地域社会と教会と学校があるから、学校で学力の面で多少問題があっても、疎外感を持たなくてすむのですよ。スポーツがうまかったり、地域社会でみんなに感謝されたり、信仰が厚くて教会に通うグループがある。学校に全ての機能が集中されすぎているというのは日本の特徴です。」

学校教育と職業選択の自由

—— 先生は社会学という立場から現代日本社会の分析をされていますが、そこで、日本の社会がどのようなプロセスを経てここまで到達したのか、今後どのような方向に向かっていくのかお話しください。

「戦前も近代社会、戦後も近代社会ですが、戦後になって新しく付け加わったものがいくつかあると思う。それは職業選択の自由。戦前も法律上はそうなのですが、大部分は農民でしょう。農民というのは田畑を継承して、後継ぎを作らないといけないから、親も農民なら子も農民なんです。二、三男とか関係ない人が都会に出ていく。都会には家業というのがありました。中小の商店、作り酒屋とか何だとか、植木職人とか、皆、家を継いだ。ごく例外的に発達していく近代的な産業部門に、二、三男とか学校を出て成績が良かった人とか何とかが家業を継がないでいく、こういう細いパイプがあって、学校はそれを後押しする役割だった。家業を継いでいる以上、学校の出番はあまりなかった。だから学校の言うことなんかあまり信用しないで親の言うことを聞くんだぞ、とそういうふうに関は言えた。戦後この家業というものが急速に崩壊していく。農民は60%から今は専業農家は10%を切っているでしょう。家業としての農業はほぼ崩壊した。それから都会で中小の商店というのは、子どもが後を継ぐという、それほど発展性のある商店はないんです。皆、老人のストアで親の代で変わる。それから、他の場合も、レストランだと思ったら、いつ

おまけ

■IEP JAPAN

の間にかペットショップに変わる。家業ではなくて、ころころ営業形態が変わる。それからコンビニとか大規模スーパーに押されて家業も壊滅状態。その代わりに何が増えたかというサラリーマン。サラリーマンは昭和の初めは10%位しかいなかった。いまや雇用の大部分、60~70%がサラリーマン。サラリーマンは増え過ぎとも言えるくらい増え過ぎなんです。サラリーマンというのは、学校を卒業して就職するというパターンをとる。そこで学校というのが非常に大きな役割を持つ。職業選択の自由というのは、学校教育の拡大によって支えられてきた。職業選択の自由というのは、言い換えると、人生選択の自由。決まっていることはなくて、自分で決めていくということ。学校で勉強しないと、人生選択の自由、職業選択の自由が狭まる。成績が良ければ大学にも行けるし、他の職業にも就いてもいい。医師、弁護士、何にでもなれる。もっとも職業選択の自由がある。それから職業高校とか何だとかになると、少し職業選択の自由が狭まり、それから中退とかになるとさらに狭まる。こんなふうなヒエラルキーができます。そうするとどうなるかというと、職業選択の自由、近代的な職業を後押ししている学校が、職業選択の自由を皆の中に分配して足を引っ張るといふふうに役割を変えてきた。」

一斉授業

「ここは一斉授業でやっている限りそうなるのです。一斉授業でやっているかぎり、一人一人を伸ばすことができない。皆で伸びていくということになるから、そうすると一人一人の違いはどういうふうに出てくるかというと、いろいろな学校へ行くという努力として現れる。そうすると、中学・高校のクラスの中にはだいたい同じ人がいるのだけれど、学校差があって、そこが大きくなってしまふ。そうすると、いい学校に行くための競争、つまり受験になる。受験が起こる根本の

理由はクラス一斉授業です。

もし、寺子屋のように一人一人の能力に応じてクラス一斉授業ではなくて、個に応じた授業をやれば、いい学校っていうのはなくなるわけです。伸びるかどうかは自分の問題ですから。すると、いい学校へ行かなくてもいい。

だから、学級内の差をなくす平等主義をやるうと思うと、現実から遊離してるわけですよ。人間はいろいろ違うんだから。人間が違うから職業選択の自由があるでしょう。でも、人間が違うことを見ないで、一つの共同体として学校をイメージをすると平等でなければならない。そういうふうに学校をつくと、現実があるからはねかえされるわけですよ。学校差があれば、親はいい学校に行かせたいので、子どもを上为学校に入れるために試験受けて受験させる、こういう論理的な順序があるでしょう。だから根本を絶とうと思ったら、親にですね、子どもにいい学校に入れようとする気持ちをなくさせる。これは無理です、親はみんな子どもがよりいい状態になって欲しいと願っている。これはいいエネルギーなんです。これは手をつけてはいけない。じゃ次はどう手をつけよう、それはクラス一斉授業をやめて、ひとりひとりにその能力や違いに適した、まさにその子が必要としていることをジャスト・イン・タイムで教える。これ、その子の権利だと思います。そういう体制に早く学校をつくり変える。」

—— 過剰な均一化というのでしょうか、金太郎飴のような形の教育というのは、むしろ逆に、過剰な受験体制とかそういったものを生んでいると。

「そうですね。その『過剰』というのを取ったらいと思いますよ。文部省がすぐ過剰っていうのを付けるわけで、『過剰な受験競争を緩和する』ってここにも紹介してあるけど、文部省の答申には必ず書いてあって。過剰ならあっちゃいけないと決まっているわけですけど、適切ならあっていいわけです。私はそうじゃないと思う。」 (以下次号)

新刊紹介

『選択・責任・連帯の教育改革』完全版
『学校の機能回復をめぐって』

堤清一 橋爪大三郎編
教育の危機が叫ばれ、改革の必要性が唱えられてい
る。しかし、根本的な改革
はなされず、対症療法に終
止している。こうした現状
を打開する根本的な教育改

革案が、出版された。

これは、社会経済生産性
本部の社会政策特別委員会

の報告書に加えて、委員会
で中心的な役割を果たした

堤清一、橋爪大三郎、大澤
真幸の鼎(てい)談を収録

したものである。報告書は、
小学校から大学までの、総

合的なシステムの改革を具
体的に提案している。鼎談

は、改革案の底流をなす思
想・哲学を平易に、かつ多

元的に語り合ったものであ

る。二十一世紀は、個人が

それ自身として尊重される

社会にしなければならぬ

し、そうなるであろう。そ

の上で、「知らない人とも

社会が作れる」ことが求

められる。

こうした社会の変容は、

終身雇用・年功序列が崩れ

つつある現在、「会社運命

共同体」の価値観を相対化

するものでもある。二十一

世紀の日本の人材をどう育

成していくのか、産業界も

無関心ではいけない。

この本は、学校教育制度

の改革を通じて、日本社会

の変革をも志すものとし

て、すべての「おとなたち

に読まれるべき一冊であら

う。(勤草書房、二二〇頁、

本体一、八〇〇円)

私たちが考える

21世紀の教育改革 -その2-

東京工業大学教授(社会学) 橋爪 大三郎

—今、いわゆる第三の開国期といわれているようなグローバリゼーションの波みみたいなものが押し寄せてきています。そのことについて少しお話してください。

グローバリゼーション

「日本の教育は、外国に目を向けないで、日本の国内で閉じていたという点が、戦前でも、戦後でも、つい最近までの特徴なんです。それは、2つ理由があって、ひとつは日本語という言語が日本だけで話されていて、日本語が話されている外国がない。もうひとつは、日本の近隣に、往来が自由で日本に匹敵する近代的な国家がなかった。この二つによるんです。例えばヨーロッパで考えてみると、先端的な近代国家が目白押しで、みんなそれぞれ優れた教育体系をもっている。それから、言語はばらばらですけども、例えばドイツ語ならば、チェコとかハンガリーとか、東ヨーロッパでは共通語みたいになっていて、それらの国々の人達がけっこうドイツ語をしゃべれたり使えたりします。それから、教会が典型なんですけれども、ポーランドの人が法王になってみたり、国際組織なのです。大学も実は国際組織なんです。大学は、ある国で学位をとれば別な国でも通用するし、ある国の教授は別な国に行っても教授待遇だし、国際組織だから、そういうふうに、国際的に組織されていて、実は小学校、中学校、高校よりも最初に出来たんです。大学が最初に出来たんですよ。ヨーロッパ最初の大学は12世紀に出来ている。

小・中・高は、それぞれの国の事情で、必要があって、全国民のために、国民形成のためにつくったわけです。いっぽう大学は、人類社会の知的共同体をつくるためにつくったものなんです。目的が全然違うんですね。このもともと由来の違うものが、教育体系として連続しているのが、ここ100年あまりの特徴ですけど、日本の場合、このシステムを国がそっくり、外国から借りてきてつくったのです。名前のつけ方もいけないと思うんですけど、小学校、中学校、高等学校、大学校っていうのがね、単におたまじゃくしがカエルになっていくように、知識の量が増えたら大学になるっていう、こういう発想しかないんです。これが間違いのもとです。小・中・高で教えるのは、日本人として、日本語を使って、日本社会の中で生きていく能力でしょう。大学は何を教えるかという、物理、化学、医学のような理科系の学問、これは実験室の中で実験を行なって、理論を考えるわけですけど、人種・民族の違いに関係がない世界共通の原理。数学もそうですね。それから、哲学とか、歴史とか文学とかいろいろあるんですけども、それを科学的に教育する。どこの国に行っても通用する知識を、人類の名前で追究するのが大学です。だからも

ともと、大学はグローバルなものなんですけれど、その大学に、昔はね、高校を終えた人の一部しか行かなかった。でも、いまは、かなりの人が行くようになったでしょ。そして、中学、高校の教育が大学に行くための準備という性質を帯びてくるから、かなり変わってこなくちゃいけない。活躍の場は日本だけではない。これは職業選択の自由を広げることになります。例えばEUなどでは、いろいろな資格、たとえば理髪師の資格、弁護士資格、様々な資格を国際資格として、EUの中だったらどこでも共通にするというふうに、している。そうすると、例えば、ドイツで自動車整備工や理容師の免許をとったら、イタリアでもフランスでもスペインでもイギリスでも開業できるんですね。素晴らしいことですね。異なる国や文化の人びとが相互理解をして、結婚して、そして外国に住んだり子どもを育てたりすることが容易になります。そういう人が増えれば増えるほど、戦争はなくなり、社会の融合が進むでしょう。日本もそういう方向に進むべき。せつかく中・高から英語を習っているわけです。でもそれは、外国の本を読んで、日本の産業が外国に追いつくための英語であって、話すため、考えるための道具ではなかった。だからこんなになっちゃった。考え方を変えて、生きる技術、コミュニケーションの技術として、英語をとらえる。もはや英語を外国語とは考えない。これもひとつのグローバリゼーション。算数や物理や自然科学の考え方も、そういうふうに、少しずつ大学を念頭に置いたものに変えていく。それが小・中・高のグローバリゼーションではないでしょうか。」

—例えば、情報革命に象徴されるように日本の情報が瞬時にイギリスとかアメリカに伝わってしまうような、世界がすごく狭くなった、というのでしょうか、そういうグローバリゼーションの影響により、今後の日本社会は変容するだろうという予測があるのではと思うのですが、そういう予測、そういうグローバリゼーション化にそなえるためにも、これからの教育は、変わっていかなくちゃならない、これまでの教育とは。そのことを少し、お話していただきたいと思います。

「グローバリゼーションにはいくつもの側面がありますね。ひとつはインターネットに象徴されるような情報の移動です。でもその根本にあるのは、ワールドマーケット、世界単一市場の成立である。冷戦が終わってから、地球がひとつの市場に統合され、商品も、資本も、情報も、そして人間まで、より自由に移動するようになった。こういう状況が生まれたんですね。これが何を意味するか。市場では、より安いものが好まれる、より品質の良いものが好まれるわけですから、競争なんです。そしてその競争を勝ち抜いていくためには、効率を高めていくしかない。効率を高めた者が、市場で勝ち残り、職業を通じて自分の生活を維持し、社会に貢献する。厳しいようですけども、この効率とか競争とかが人類全体にとってプラスになるのです。より少ない資源を使って、より豊かな幸せを生み出すためには、この効率とか競争とかいうことは、無視できない。効率の点で劣ったから、ソ連が壊れたんでしょう。社会主義も壊れたでしょう。そして市場経済が勝ったでし

よう。その市場以上に良い方法はとりあえずないので、これに付き合っていかなきゃならない。そしてこの市場の中で、職業選択の自由、人生設計の自由も実現されるわけでしょう。そうしたら学校教育の目的のひとつは、この職業選択、人生設計を世界市場の中でどういうふうに実現していくかということになる。それには、国際競争力がなければいけない。日本の産業システムの競争力というふうにも考えられます。日本に企業がないと日本に就職できないわけですから。けれどまた別の観点から言えば、個々人の能力開発、個々人の競争力を高めることが大事になります。かりに日本がダメになったって、じゃあ日本人の乗る自動車はどこでつくるのか、日本の企業が作らなければ外国の企業を作るわけで、その企業は生産活動をしているわけだから、雇用がうまれてそこに就職すればいい。日本の企業にしか就職できないんじゃないじゃなくて、外国の企業にも就職できる能力があれば、日本経済の運命と関係なく、自分の運命を切り開けます。こういう個々人一人ひとりの能力開発、これがグローバリゼーション時代の教育のあり方です。では、個々人はどういう能力を開発したらいいのか。これは個々人によるわけでしょう。だから、きみのこういうところを伸ばしたらいいと思うよ、きみはここが伸びるよ、ということをもとに話し合いながら、教員も見きわめて、そこを伸ばすような教育をする。」

一もうひとつ、これからの教育で考えていかなければいけないのは、基本的には50年前にシステムとして導入された教育のことです。導入された当時は、敗戦で、非常に、日本国中がもう貧しい、経済的にも、心も非常に貧しい状況にあった。しかし、1980年代に、日本はアメリカに肩を並べるぐらいにいわゆる非常に経済的に豊かな国になった。ところが、私たちは相変わらず50年前、あるいは100年前の教育の価値体系に基づいてやってきている。ところが、今、私たちが子どもたちにやっている教育って、そういう子どもたちというのは、経済的に貧しいのではなくて、経済的にきわめて豊かな時代に育ってきた子どもたちなので、私たちが、50年前、あるいは100年前から金華玉条のごとくに信じている教育というものが、当然豊かな時代の中では、子どもたちの方から疑問符にさらされるのではないかというふうに思うのです。

学校の自己改革が遅れた理由

「まず、学校の自己改革が遅れた理由ですけれども、それは、日本では学校が教育しなくても、そのぶんを企業が教育するからです。企業がなぜ、従業員を教育するかというと、それはその従業員が生涯にわたって、その企業で働くと考えているからです。もし、従業員を熱心に教育しても、給料が高いよその会社に引き抜かれて“ハイ、さようなら”、これだったら企業はばかばかしくて、社内教育をしません。だから、終身雇用を念頭に置いているわけなのです。このシステムは実は、完全な市場経済ではない。完全な市場経済だったら、労働市場があって、中途採用とか、転職によるキャリアアップがしょっちゅう起こ

らなければならないわけだ。それがなくて、学卒で企業に入ってそこでずっと勤める。これはね、職業選択の自由じゃなくて、人生を企業にあずけてしまうことになるでしょう。このシステムがあったから、学校教育なんか、あんまり信用されてなくてどうでもよかつたんです。その結果、旧態依然のものが今まで残ってきたんです。

これではグローバリゼーションができない。というのは、今までの企業じゃダメで、新しいベンチャー企業や、産業フロンティアがうまれて、人材を集めなくちゃいけない。そのときに、今までの企業が終身雇用でやっていたならば、中途採用ができないでしょう。集まるのは落ちこぼれカリストラにあった、二流、三流の人材になってしまって、いい人を引き抜くことができない。なので大学新卒を集めるしかない。もし本当の意味での労働市場であったら、将来性のある企業に活きのいい人材が中途採用でどっと流れてきて、そして、将来性のない企業は、人間をうまく減らすことができ、産業構造の転換が速やかなんです。アメリカにはこれがあるでしょう。アメリカの産業構造は80年代から90年代にドラスティックに変化しました。日本では、出向だ、なんだと言って、製鉄会社でも、どこでもみんな苦勞してるけど、それは労働市場がないからなんです。社内配置転換、新規採用の停止で調整するしかないんですね。ですから、労働市場が出来上がると、企業はばかばかしくて、社内教育ができなくなる。そうするとキャリアアップのためには、学校に行かなくちゃいけないということで、みんな大学に入り直す、みんな専門学校に入り直す、みんな資格を取り直す、みんな学校に期待し始める。こういうことが起こってくると思います。個人の就職・転職の自由を保障するために、産業社会に役立つ実践的な教育を大学なり短大なり高等専門学校なり、そのレベルできちんとやる。そして将来そういう教育を受けられるために基礎となる学力は、高校や中学できちんと身につけておく。こういうスタイルになります。」

一少し、視点を変えて、先生がここでおっしゃっておられると思うんですけど、これまでの教育っていうのは、要は、産業に役立つための人間だけをつくってきた。そうじゃなくて、これからの教育っていうのは、産業社会に役立つだけではなくて、その人個人にとって、意味のある教育というものを学校が与えないと、子どもたちから、学校はそっぽを向かれてしまうのではないかと、というようなことをおっしゃっておられると思うんですけど、その辺りを少し……。

民主的な社会における親子関係

「先ほど、話したことと、今の問題は関連するので、そのつなぎで言いますと、豊かな時代の社会では、子どもが学校からそっぽを向くという傾向がある。最近確かにそうなっていますね。つまらない、こんなものをやってるんだっつたらもっとおもしろいことがいくらもあると。実はね、これはね、いま企業のことを言いましたけれど、親の態度の影響も

とても大きいんです。親が『学費を出すから、頼むからおまえ勉強してくれ』という態度をとるから、子どもがつけあがってそういうふうになるんです。お金があって、親より優位に立っていれば、誰が好きこのんで勉強するでしょう。少なくとも、学校にいる間、社会に出るまでの間、ぬくぬくとしているわけだから、きちんと勉強するとか、将来のため自分の能力を高めていくとかいう動機がわきにく。子どもがリアリズムから離れて、コンビニとか、ビデオとかゲームとか、そういう非現実的なものばかりにのめりこんでいきます。これは、現代社会の情報化が進んで若者が敏感になったのではなくて、親に問題があるからだと思えます。

そうすると、親が子どもの学費を出さないというのは民主的な社会にとって、とても大事です。どうしてかという、親は、子どもに学費を出したいのが人情でしょう。これは家業をもっていた時代の名残りです。そうするとどうなるかという、子どもの進路が親の所得によって影響されてしまう。親の所得はどうやって決まったかという、親が実力でもって前の世代で勝ち残り競争をやって、そして、たまたま順調に行って所得をもっているわけでしょう。このことと、子どもの人生とは関係ないの。これをもう一回キャラにして、みんなおなじ条件でスタートして、適材適所になって配分されれば、本人の幸せも、社会の全体としての効率性も最適に実現できるでしょう。ところが、親が学費を出すと、どうということになるか。最近よくあるんですけれども、アメリカに、何万人も日本の大学生がいるけれども、ほとんどが日本の大学受験で失敗した人なんです。だからどうなるかという、学力が足りなくて大学になかなか入れないし、入ったとしても授業はわからないから、卒業できなかつたり、5年も、6年もかかたりして、車買ってもらって遊んでるわけですよ。たいへんな資源のムダ。」

—大学生の奨学金、ローンのことですね。

「親が学費を出さなければ、子どもは自分で学費を算段しないと大学に行けなくなる。学力を身につけるにはコストがかかる、しかし、将来は開ける。楽をして、勉強もしない、アルバイトもしない、だらだらしていれば、今は楽だが、将来は苦しい。私の人生はいつたいどっちがいいんだろうと考える。自分の能力にうんと自信がある人は人の何倍も努力して、よい職業、例えば医者などになって、それで本人は所得を得て幸せになるでしょう。なんか不公平みたいだけでも、これは社会にとっていいことなんです。どうしてかという、医者は誰でもなれるわけじゃない。なるべく素質があって、手術がうまくて、骨や筋肉の名前も全部覚えて、当直でも深夜にがばっと飛び出して患者さんを診てくれる、そういうタフで能力のある人が、お医者さんになって欲しいでしょう。本人が喜んで自分でまず勉強して、いいお医者さんになって、ちょっとくらい給料を多めにあげてもいいんですよ。死にもの狂いで働きますよ。そして、たくさんのお医者さんを見事に治す。これは社会のプラスになるわけですから、少しぐらいの待遇をよくしたっていいわけですよ。そうじ

やない人がいましてたくさんお医者さんになっている。親のすねかじりで入学金払ってもらって、私大で何回も国家試験落ちたりなんかして。とっても不公平です。同じことは他の職業についても言えます。そこで、職業を自己選択の問題として考える。教育にはお金がかかるんですから、そういう教育をきちんと受けないといけない専門職は給与を高くすべきで、実際高くなるでしょう。その分を取り返せる見込みがあったら、自分がローンを組んで、学費を借りればいい。親はタッチしない。そうしたら、学生の顔つきも変わるんです。これも、アメリカの学生を見て如実に再確認しました。」

—これからの教育とその哲学、理念について少しお話しいただけますでしょうか。

多様な理念の自由な共存

「これについてはいろいろな議論があったんですが、こういう結論になりました。こんな人間をつくりましようとかね、あんなふうな方法で教育をしましようというような、具体的な理念は、語りにくいし、語れないし、語る必要がないだろうと思います。どうしてかと言うと、ある理念を掲げて、国全体の教育を行なおうとしても、必ず異なった理念の人が出てきて、いや、こっちがいいと言い始め、論争になります。個々の学校は、それぞれ理念を掲げて欲しいですよ。個々の教育者はそれぞれ自分の信念と理念で教育をして欲しいですよ。でもそういう信念や教育理念は、複数あるし、複数あるべきだし、その中で、どの教育方法が正しいのか、より良いのかをめぐる論争や、競争があつて欲しい。こういうふうにするから、この教育改革案では、特定の理念を掲げていません。そんな必要ないと思う。むしろ、その自由を認めて、個々の教育者が、個々の学校が、いろんな人たちが精一杯、知恵とアイデアを出し合つて、それぞれ実験し、よりよいものが生き残る。そして不断にお互いに学び合つて討論すると、こういうことでやっていこうじゃないか。それがこれからの教育の理念じゃないだろうか、あえて言えば、多様性にもとづく自己責任の教育、これが強いて言えば、私の考える<理念>です。

—その辺りは、違った人たち、全く知らない人同士が初めて会つても、社会を構成しているような、そういう教育にしなきゃいけないっておっしゃってることに通じますね。

「はい。」

—その場合ですね、多様な議論の場が自由に出来るような社会がつけられたとき、そのために身につけるべき素養というんでしょうか、それは、どのようなものですか。

教育で身につけるべき基礎的素養

「人びとに共通に要求するものはミニマム、すなわち最単純、最小限のものでないといけません。ごちゃごちゃ身につければ身につけるほど、それを身につけていない人、身につけそこなった人は仲間外れだというふうな感じになるんです。多様性を認めなくなってしまうことになる。多様性を認めるためには、全員が身につけるものは少なければ少ないほうがいい。でも、対話が成り立つためには、対話ができるための能力、すなわち言葉をきちんと正確に、相手を傷つけないで、自分をうまく表現するように使えるという能力。それから、もうひとつ、同じようなことですが、言葉以外の方法、例えば暴力、これを使ったら言葉はゼロになってしまうわけですから、どんなときでも、感情をきちんと自己コントロールして、暴力とか不正とか、そういうものに訴えないし、それを見逃さない。こういう倫理観、行動力、決断力も必要です。このふたつがないと、いま言った多様性を育てていくことにならないんです。だから言葉を使う能力と、暴力に訴えない能力、これは絶対に必要です。」

—それが学校教育の中で身につけるべき、基礎的な素養ということですか。

「学校が、もし最初に子どもが経験する社会であれば、そこでこの能力を身につけなかったら、後で困ることになります。その上で、知識は自ずからついてくるものなのです。」

—3番目としてそういう、従来からの知の教育があるということですね。

「はい。それは1番目でも2番目でもなく、3番目ですね。」

—で、そういうものを達成するために、それを満たすような前提条件がきますよ、ということ、例えば、学校を、もう少し開いたらいいんじゃないかと、ひとりひとりの子どものニーズというものに対して考える教育っていうんですか、先ほど、一斉指導ではなくて、今が楽しいみたいな教育というものを、やはり前提条件として考えておく必要がある、とおっしゃっていると思いますが、そこをもう少しご説明いただけますか。

「教育は、どうしても将来に対する準備という面があるから、一種の投資です。投資というのは我慢して将来に備えるわけだから、やらなくてもいいようにみえることでも必要だからやらなくちゃ、と。そういう我慢とか苦しみとか、努力とか、そういう要素はあるし、なくせないし、あった方がいい。だけど、苦しみばかりだったら、それは、人間生きてることにならないです。だから、教育の場が苦しかったら、苦しみだけだったら、おかしいし、苦しみの先に喜びがみえていなかったら、希望がなかったらおかしい。希望があれば、今は苦しくても我慢できるし、それが苦しいとは思わないです。それぐらいの

強さは、子どもにあると思う。その強さがなかったら、未来はないと思います。だから、親がそのことを信じ、教師がそのことを信じ、制度がしっかり出来ていれば、途中の道が多少苦しくても——。例えば、簡単に言えば、九九を覚えるのが大変だとか、身体を鍛えるのでちょっと疲れたけどがんばったとか、そういうふうなことがいくらあっても——。耐えられる。最近、子どもはこらえ性がないとかいって、ちょっとしたことで音を上げるとか言いますね、戦前はすごいことをさせても、子どもはついてきました。どこが違ったのか。希望があるかないかです。軍国主義教育とか言って戦前の教育は全否定されるけれど、もしそこに何か捨てることがあるとすれば、教育は人びとにとって喜びでした。すなわち、ありふれたものではなくて、貴重なもので、教育を受けたら必ずいいことがあった。そこには希望があった。今は、それがね、ないんです。だから教育がどんなにそれ自体楽しいよ、と言ってもむだです。むしろ、苦しくても、希望があったほうがいい教育だ。そういう面もあるかもしれない。ただ同じことを楽しくできるものなら、楽しくした方がいいと私は思いますけれども。」(以下次号)